

亀井勝一郎

日本人の思想



# 日本人の思想



日本の歴史というものを全体としてふり返ってみると、非常に重要な時期が三つあります。

この重要な時期と、私が言いますのは、どの時代も、非常に興味深い時代ですけれども、特に重要だという意味は、外来の文化が日本に入ってまいりまして、そして日本民族全体が、その外来文化の影響を受けて、非常に大きな混乱を経て変化していく歴史があります。

皆さんも御承知の通り、古代に於いては大体七世紀か

ら八世紀、九世紀のおよそ三百年間で、その当時の朝鮮、あるいは中国の唐の時代が中心になりますが、この朝鮮文化、あるいは唐の文化を受け入れて、その時、日本に初めて仏教を始め、儒教、道教、及び、その当時としての新しい技術が日本に入ってきました。

そして大体九世紀の前半を頂点として、日本の当時の文化が、非常に唐文化の影響を強く受けて、日本民族というものが大きく変化を遂げています。九世紀の後半から十世紀、十一世紀、つまり平安時代にかけて、我々の祖先は、その外来文化を咀嚼し、日本風の仏教、ある

いは日本風の新しい文学を、作り上げていったわけです。古代においては、この七世紀から、九世紀までの三百年間というのは、日本の歴史上、非常に重要な時期です。この時、一番、我々の祖先に強い影響を与えたのは仏教であって、それがその後、日本の文化の伝統となつて、今日まで続いて来たわけです。

その次に日本が外来文化に接触したのは、織田、豊臣時代です。この時は御承知の通り、初めてヨーロッパというものに接触しました。そしてキリシタンが、つまり、その当時のキリスト教の一派であるキリシタンと、ポル

トガルの文化が入ってきました。これは五十年間位の短期間ですが、やはり日本の、その後の文化には、非常に大きな影響を与えたわけで、まもなく徳川時代になり、鎖国の政策をとって、一切の外国、ヨーロッパというものと国交を遮断したために、その後ヨーロッパ文化の影響というものは、二百数十年間にわたって、途絶えたわけです。

もし徳川幕府が鎖国政策をとらなかつたとするならば、今日の日本の文化というものは、非常に違うものになっていったと思います。とにかく鎖国の政策のために、



ここで一たんヨーロッパ文化というものと日本は交渉をもたなくなつたわけです。

その次に重要な時期は、いうまでもなく、明治、大正、昭和の時代です。この期間は御承知の通り、ヨーロッパ及びアメリカの新しい文化、それまで日本には存在しなかつた性質の全然違つた文化が、非常に激しい勢いで入つてきました。現に我々が経験していますように、風俗も、習慣も、ものの考え方も、かなりの程度に西欧化しています。

しかし他方には、やはり仏教とか、儒教とか、その他

古い伝統が続いていますので、現在の我々の文化生活の内容をふり返ってみますと、そういう古来の伝統的なものと、それから新しい外来文化と、この性格の違ったものが、激しい勢いで交り合つて、そこで現在の私達というのはもうすべて、風俗も習慣も御承知の通り、混乱に、混乱を重ねています。殊に敗戦後の十六年間というものをふり返ってみますと、特にアメリカ文化の影響が非常に強いのです。

アメリカであろうが、ヨーロッパの国であろうが、すぐれたものであるならば、我々は、喜こんでそれを受け

入れて、学ばなければならぬのですが、その受け入れ方をみていますと、秩序も順序もなく、御承知の通り、非常に支離滅裂な状態で、我々はそれを受け入れていません。

しかしこの明治元年から今日までの期間は、やはり日本歴史上非常に重要な時期でして、現に我々は、日本民族として、いろんな面で変化を迫られている。自分でたとえ望まなくても、私達の生活内容をふり返ってみますと、どんどん西欧の習慣を受け入れています。また、ものの考え方の中にも入って来ています。片方には、今言

いましたように伝統がある。これが今後どのようなお互いに融合していくか、そこに調和のとれた新しい文化が作り上げていくかということは、正直な処、現在からは予想できない。あと百年、あるいは二百年かからないと、現代文化の混乱ということは直らないかも知れない。

現に今、我々はこの時代に生きていますから、この混乱にたえていく以外にないのですが、とにかく日本の歴史をふり返ってみますと、非常に重要な時期に我々は生きています。生きていきたいと思います。

個人個人の年令としては、七十年、八十年というのは

相当の年令ですが、歴史の長い目でみますと、百年間と  
いうのは非常な短期間です。この僅かな間に、我々日本  
人がやって来たものは、ひどく複雑であり、波瀾万丈と  
いってもいいし、今後、我々の国がどうなっていくかと  
いうことは、見当がつかないほど難しい事態です。

　　こういう七世紀、八世紀、九世紀、あるいは十六世紀  
後半の五十年間、あるいは二十世紀、殊に十九世紀末か  
ら二十世紀の今日に至る日本というものをふり返ってみ  
ると、民族として外来文化の影響を受けて大きく変化し  
ていくような重要な時期であって、現に我々はその中の

第三番目に重要な時期を生きつつあると、いいと思います。

よく思想という言葉を使います。今日も使っています。我々の使っている言葉、例えば思想という言葉でも、あるいは自由という言葉でも、あるいは愛情という言葉でも、我々人間の使っている言葉というものは、よく考えてみますと非常にあいまいです。我々は口では思想だとか、自由だとか、平和だとか、いろいろ言っています。それが、それなら思想とはいったい何か、信仰とはいったい何か、自由とはいったい何か、というふうに私達

が平生、何げなく使っている言葉を一つとり上げて、これを厳格に調べてみますと、我々の使っている言葉というものは全部あいまいです。我々は実にあいまいで不安定な言葉というものを毎日使って、それで用を足しております。これは言葉というものの性格によります。

我々日本人は、日本人だから、日本語を使うならばなんでも言える、というふうに思いがちですけれども、それは非常な間違いであって、人間の言葉というものは、いくら繰返し繰返し語ってみても、自分の思っている事の十分の一、あるいは半分も表現できない。

これはおそらく御経験になっていると思いますが、少しでも複雑な思い、あるいは多少でも心の中に悩みがある場合、私達がそれを口に出したり、あるいはペンをとって書いてみると、いくら言ってみても、幾らペンをとって書いてみても語りつくせないものがあると思うのです。

これは私が歴史をふり返ってみて、つくづく感じる事ですが、歴史の中には、どれ程多く無名の人々の願いというものがうずもれているか、例えば仏教なら仏教の話に限ってみても、すぐれたお坊さんの書いたものとか、



あるいは立派な仏教芸術とか、そういうものは残っています。しかし、全然名前もなにもなく、非常に貧しい人で、しかも心の中で仏様を信じて、そして死んでいった人がたくさんあるに違いない。優れたお坊さんとか、そういうものは伝っています。しかし、その背後に何千人、何万人の人々の、表現できない想いというものが歴史の中には埋れているものであって、私達が歴史を読む場合には、目につくものだけでなく、あるいはいわゆる有名な人だけでなく、そうした無名の人達の想いというものが、そこにかくれていることを推察するということが、

歴史を読む場合に非常に大切だと思います。

それは現代でも同じことです。ものを書ける人間とか、あるいはいろいろお話できる人間は、自分の言いたい事をしゃべっています。がそれにしても大変不完全なものです。まして表現する場所も、表現する力もなく、しかも心の中では思いつめている人がたくさんいるわけなのですから、宗教も文学も、実際は、そういう人々の思いの上に成立しなければならぬわけであって、従って、宗教とか文学というものは実に語りにくい、一番この世の中で語りにくいものです。表面に現れたものは分りま

すけれども、心の中の念仏の時の思いというものを適確に捕えるという事は不可能です。

従って我々の日常の言葉というものも、よく考えてみますと、今言いましたように、ひどくあいまいな要素をもっています。そのあいまいなものを幾つも組合せて、それでやっとの思いで我々は言いたい事を言おうとしているのですが、本当に人間の心を適確に、正確に表現するということ事は難しいのです。

思想という問題も、思想という言葉もそれと同じであって、思想とはこれこれのものであるというふうに簡単

に定義はできません。定義はできませんけれども、私自身は、日本の歴史や、あるいは外国の歴史をみて、思想というのは結局、こういう事だと思えます。根本は信仰の問題であって、西洋の場合はキリスト教の神、日本の場合は仏教の仏、キリストの神なら神、あるいは仏なら仏というものに直面して、聖書なら聖書を読む、経文なら経文を読んで、自分は神や仏を信ずるか、あるいは信じないか、宗教というものを肯定するか、あるいは否定するか、この肯定否定、あるいは信じないかという、心の戦いの結果として、思想というものは成立す

ると言っていていいと思います。

外国の歴史をみると、キリスト教の伝統というものが非常に深い。ある人はそれを信じる。ある人はそれを信じない。神を否定する。それから信じようか、あるいは信じまいかと、たえず疑って、迷いに迷いを続けていくのです。

仏教の場合もそうです。はっきり仏教を信じている人、それは昔も今もいます。それから、仏教などというものは駄目なものだ、何も仏などというものを信じる必要はない。すべて宗教などというものは絶対否定するという

人もいる。それから信じたいと思うけれども、自分には信じ切れない。宗教というものを否定したけれども、どうしても否定できない、それならばどうするか、どうしていいか分らないという人もいる。こういう、宗教というものを中心としての対決する心といいましようか、それは肯定してもいいし、否定してもいいし、迷ってもいいし、人によっていろいろの場合があると思いますが、根本は神および仏に対して自分自身は如何なる態度をとるか、それを決定するための心の戦いが、即ち思想というものだろうと思うのです。

このことが別の言葉で言いますと、人間の生きる死ぬの、死の問題に関係してまいります。人間である限り、自分の将来の事は考えますし、できるだけ幸福に暮したいと思うのです。いろいろの夢を、私達は抱いているのです。しかし人間にとって、一番確実な、絶対間違いのない可能性というのは何かと言いますと、人間というものは最後には必ず死ぬ、これだけは絶対に間違いないのです。

我々は未来に対していろんな夢をみる。ある人は、その夢の通りになるでしょうし、またある人はその通りに

いかない。大体我々人間は、自分の思う通りにはいかな  
いもので、我々の生活をふり返ってみても、事業でも、  
勉強でも、自分の思う通りにいったという経験はまずな  
いと思います。いろんな障害物があつたり、思いもよら  
ない不幸があつたりし、我々の前途というものは実に不  
確実であり、また、不安定です。しかし、その中で絶対  
間違いないのは死の問題なのであります。

それがいつ来るか分らない。多分自分には、まだまだ  
来ないであろうと空想して我々は生きていますが、それ  
は単なる空想であつて、いつ、何が動機で私達に死がお



そいかかってくるか分らない。その場合、人間の正体というものは、その刹那に決定されるものであって、いよいよ死ぬ時に自分というものは何であったか、ということをふり返るに違いない。

たとえば死ぬ時期というのが遠い将来であってもです。我々は心の中で、自分に問いただしてみることがある。もし自分が今死ぬならば、この死というものがもし、間近かに迫っているならば、自分はどのような態度をとるべきであるか、と。

例えば、今晚の十二時には、我々は必ず死ななければ

ばならない、と仮りにです、仮りに自分に問いたただして  
みる。そうしますと私達の心の中というのは、いろんな  
ふうに迷い続けると思うのです。その中の一つは、いよ  
いよ今晚の十二時に死ぬと決った。さて我々は自分の過  
去、将来というものを全部ふり返ってみる。そうします  
と、人間らしい生活をした事もないし、全然努力もしな  
かった。あれもしたい、これもしたいと思っただけでも、  
自分の思う事を何一つ果せなかったという、自分の人生  
に対する、悔恨の気持というものがでてくる。もう一つ  
は、今晚の十二時にどうしても死ななければならぬな

らば、死期のくる十二時まで思い切って遊んでやろう、  
快樂を徹底的に追求してやろうという気持も人間として  
おこる。それからまた、今晚の十二時にどうしても死な  
なければならぬならば、その時間まで、自分の一番好  
きな本を読んでやろう。あるいは自分の信じている本を、  
たとえ十ページでも二十ページでも読んで、最後に人間  
として豊かな心をもって死にたい、こういう気持もでて  
くるだろうと思う。これは仮定の話なのですが、やたら  
に今晚の十二時に死んではたまらないですから、これは  
我々の観念の中のでき事なのですが、しかし私達は、そ

ういうふうを考えてみた時に、つまり、死の観念というものを自分の目の前においてみた時に、案外自分の本根、正体というものが分るのではないでしようか。

そしてその時の心の動揺と、それから先程言いましたように、神や仏と対決して、自分は信じるか、信じないか、その自分の心を決めるための心の戦いと、この思想というものは、この両方から成立します。もし、思想とは何かと問われたならば、私自身は今申しましたように神や仏を信じるか、信じないかと、そのための心の戦いと、それからいよいよ死というものが切迫して来た時、

自分はそもそもどういふ態度をとるか、その両方をつきつめて考えた処に初めて思想というものが成立する、こう言っていていいと思います。

よく我々は思想といいますと、宗教思想の場合でも、社会思想の場合でも、思想という言葉を何か非常に大きな理論的体系とか、あるいは非常に難しい理屈を思い出します。

実際、思想というと、いろんな思想の本を読んでみると、非常に難しい。それは複雑な要素を持っていますから、読んでみても難解な点が多いだろうと思いますが、

しかし一番根本になるのは、今言いましたようなことです。

ですから私はいつもこういう機会に言うのですが、例えばここに一人、学問がない、あるいは教養もない、学校へも、ろくろくいった事がない、そういう文字通り、無学文盲の女の人が仮りに今、いるとする。その女の人、何か男にふられたりなんかして非常に悲しくなつて。自分は生きていこうか、それとも死のうか、とても生きていく勇気がない、では自殺しようか、生きようか、死のうかと思つて迷っている。つまり考えて考えぬき、思

いに思いつめて生きようか、死のうかと思つて迷つてい  
る。その女の人は、たとえ学問がなく、教育がなくても。  
思想家としての基本的条件というものは備えているわけ  
です。

現代の日本には、我々のような評論家はたくさんいる  
けれども、思想家は一人もないということとはよく言わ  
れます。偉い学者はたくさんいるし、難しい理論をふり  
廻す評論家もたくさんいる。しかし思想家らしい思想家  
というものが現代の日本にいなくなつたというのは何故  
かと言いますと、外国の思想や伝統についていろいろ説

明し、解釈する人はたくさんいるけれども、この無学文盲のこの女の人のように、思いつめる能力というものを失うというと、そこに思想というものが成立しない。生きようか、死のうか、そういうふうに変苦しい、思いつめなければならぬような状態は、人間の一生に時々くるかも知れない。その時の自分の思いつめた心というもの、すべての宗教の基礎になり、またそもそも思想というものは、そこからしか発生しない。私はそう思います。

普通の意味での、学問があるとか、教養があるとかい



うことも、それなりに結構ですけれども、もっと根本のことは今言いましたように無学文盲の女であつても生きようか死のうかというところに自分を押しつめてみた、その心というものがなければ思想というものはそもそも成立しないということです。それと先程言いましたように、自分がいよいよ死ぬという時にどうするかという問題。それと、神、あるいは仏というものを信じているか、信じないか、と。こういうお話を致しますと、なるほどそれはそうだけれども、しかしもう現代では、そういうことを言ってもしようがないじゃないかと言う人がいま

す。もう現代は、これからはますます社会主義の方へ向うであろうし、あるいは共産主義の力も強くなるであろうし、仏教でもキリスト教でも、宗教などというものは、これからますます衰えて、大体宗教は消滅すべき運命にあるのである、という考えをもっている人もいます。

そこで私は考えるのですが、一体共産主義でも、また社会主義でもその一番根本にあるものは何かというと、やはり宗教に対する態度です。

つまり無神論です。無神論というのは宗教を否定します。否定するということは、肯定するということと同じく

らい困難なことです。何故かといいますと、キリスト教でも仏教でも、徹底的に勉強して、自分はそれを信じるか、信じないか、長い間心の戦いを経過して、そのあげくにどうしても信じることができないう、宗教というものを自分は否定せざるを得ないと、そういう長い苦しみのはてに否定の立場に立つならば、それは一つの思想であると言っていると思います。

しかしまったくの無関心、あるいは無知、つまり宗教というものについて何も知らないから自分は無神論者であり、宗教も否定するという人が多いということとは、こ

れは日本人の思想的怠慢であると私は思います。

実は明治、大正、昭和の日本の文学をふり返ってみると、大きな欠点があります。外国の文学と比べてみて、大きな欠点が二つあります。その内の一つは、文学者の宗教的無関心ということです。これは外国の文学をみてみますと、ある作家は、「自分はカソリックである」と、はっきり言う。ある作家は、「自分はプロテスタントである」とはっきり言う。またある作家は「自分は無神論者である」とはっきり言う。またある作家は、「自分はまだまだどちらともつかないが、絶えず心の中で迷い悩

んでいる」とはつきり言う。必ず宗教に対する自分の態度を鮮明にしています。日本の場合にはそれがありません。つまり無関心なのです。

単なる習慣として自分の家は先祖代々、何々系であったから、仏壇を飾って、そして時々御供養する。それだけの話。つまり習慣としては存在するけれども、思想上の問題としては自分の心の中に受けとめない。その事が明治以後の日本の文学を思想的に貧弱たらしめている。これが一つの欠点です。

それからもう一つは、その時代を本当に代表するよう

な、典型的な人間が描かれていない。いろんな面白い人物は出て来ます。しかし多くの国民にいつまでも愛され、いつまでも国民の心の中に残るような代表的な人間というものが、明治、大正、昭和のどの文学に描かれていたか。今なお愛される人物は果しているかということを取り返してみると、それもない。

もつともこれは文学者だけの欠点ではなく、先程言いましたように、明治以来、いろんな種類の外来の文化が入って来て、混乱に混乱を重ねてきたから、ある時代を本当に代表するような典型的人間像というものが成立し

なかつたことは無理はない。無理もないのですけれど、しかし、宗教に無関心という事と、典型的人間像の欠除という事は明治以来の日本文学のやはり欠点です。

我々文学をやる者は、これは欠点として自覚しておらなければならぬことだと思ふ。これは今日の話からそれてはいますけれども、この宗教的無関心ということが文学の上でも非常にマイナスになる一つの例として申上げたわけです。

そこで次に問題になるのは、私達日本人のものの考え方です。私は思想というものの意味を今のべたように考

えていますすが、さて仏教に対しても、またキリスト教に対しても、徹底的にそれを信じるか、信じないか、大變に悩むというふうな経験が明治以後だんだん稀薄になつて来ていると思うのです。ですから、我々ものを書く人間の間では、一体、この日本人というのはなんだろうか。日本人のものの考え方の特徴というものがもしあるとすれば、それはどこに現れているか、それはどういう長所を持っているか、どういう欠点をもっているかと真劍に問うことがすくない。キリスト教の場合は、神を信じるか、信じないか、というふうな問題の出し方が、非常に



鋭くて、対決の力というものが、非常に明解です。仏教の場合にはまあ寛容の精神というか、あるいは煩惱即菩提の即というような、（これは仏教的に深い意味があります）考え方があるためか、歴史をふり返っても、我々日本人のものの考え方には、キリスト教的な鋭い対立、信じるか、信じないかという、かなり性急といえれば性急な、ある点では厳しい態度というものがありません。

無論鎌倉仏教などには鋭い、また厳しい態度をとったお坊さんもいますけれども、大体日本の宗教と文学の歴史をふり返ってみると、そういう態度はすくない。

日本人というのは昔から大變芸術的な国民です。

つまり、美意識と言いましょるか、美しさに対して、非常に敏感な民族で、これは日本民族の一つの特徴として、挙げていいと思いますが、宗教の場合、一番大切な死の問題と、罪の問題については対決の精神が稀薄です。

ある宗教を信ずる人の心というものは、個人個人に依って違います。千差万別です。ある人は体が弱いために、またある人は治らない病気のために、またある人は非常に貧しさのためにその他家庭的な不幸のために、宗教を信ずるのであって、人の心はそれぞれ違いますけれども、

しかしその中でも重要なのは罪の問題です。外国人が日本の歴史を読みますと、罪悪感が非常に薄いのではないか、ということをよく言います。これもキリスト教と比べられては困るので、仏教には独自の罪悪感というのがあるのですから、これを西洋風に理解するということは大変困りますけれども、しかし日本の歴史をふり返りますと、例え罪をおかしても、それを美化する傾向が非常に強いのです。

例えば仏教が入ってくる以前、つまり、今でいう神道というものがあります。神ながらの道というものがあり

ます。この神道における罪の問題というのは、御承知の通り、のりとの中に書かれています。それを読んでみますと、仏教上の罪と非常に違うのであって、むしろ、穢れとか、禍いとか、天災みたいなもの、あるいは不潔なものに対する憎悪の感情が濃厚です。

そして今でも神主が祓いをやるように、祓い清めることによってその罪は解消する。川に流される。あるいは海に流される、この祓いと、流してしまおうという観念は、古代の神道からそうなので、今でも我々は過去に過ちをおかしたり、失敗した場合に、それを水に流そうと言い

ます。

それはある意味ではあつさりして、昔のことにこだわらないという、いい面もあるかと思えますけれども、しかし人間としておかした罪というものを、そう簡単に水に流していいものかどうか。もっと徹底的に罪悪感というものを深めてみる必要がありはしないか。この場合の罪というのは、無論、法律的な罪ではなくて、自分自身の心の中でおかす罪です。これは宗教的にいえば、当然そうです。

例えば嫉妬心。人間が生きていく場合には、どうして

も嫉妬心というものから離れることができない。我々が心の中に抱いている嫉妬心というものを分析してみると、必ず自分の競争相手が死ねばいい、競争相手の死を、あるいは過失を心の中で望んでいます。競争相手が成功すると嫉妬心がおこる。ねたましく思う。なんとかして自分の競争相手が失敗してくれればいい、極端な場合には死んでくれればいいと思う。ですから嫉妬心というものは、殺意を含むとっていいと思います。これも実際の行動にうつすと、いうまでもなくこれは殺人、法律的な意味での殺人になります。殺人は無論、罪であ

る。しかし心の中で相手が死ねばいいというふうにも、嫉妬心からそう思っていたならば、その人は心の中で人を殺していると同様ではなからうか。

つまり外部には現れないけれども、心の中でおかす犯罪というものがあられるわけです。それを明確に自覚させるのが宗教であると言っていると思う。そういうふうな罪というものを内面化して考えた人として親鸞上人がその頂点に立つわけです。

仏教の経文を読んでみますと、殺傷とか、盗みとか、情慾とか、あるいは嘘をつくとか、いろいろ罪として挙

げられています。その一つ一つを厳格に自分にあてはめて考えてみると、どういふ人間でも罪をいつおかすか分らない、いわば犯罪の可能性というものを持っている。

人間の生命というのは非常に危険なものであって、まさか自分だけは人を殺すことにはあるまいと思っていて、も、いついかなる時に、どういふはずみで人を殺すかも知れない。まして人間というものは、情慾と、食慾と物慾という、三つの慾望をもっており、その慾望がなければまた、生命もないです。ですからこの三つの慾望、即ち、生命というふうにか考えた場合、我々の生命というも



のが、どんなに危険な存在であるか、いつ、どんなことをおかすか分らない。つまり人間というのは罪悪の可能性性といっつていいと思う。その可能性を罪の自覚にまで深めた人が、親鸞上人です。

つまり外部に表れた処だけでなく、内部の、心の中の可能性の問題、ここに罪というものの、一番深い問題があると思うのです。われわれは自分で考えて自分で都合のいいように、これは罪で、これは罪でない、ということをよく言いますけれども、しかし人間というものはまことに勝手極まるもので、いつでも自分の都合のいいよ

うに、自分を弁解していません。そういう自己弁解とか、また、我々の判断というものを全部撤去してしまつて、もし仏なら仏の目によつて我々が自分自身の心の中を照らし出されたら、一体どういふ事になるか。我々は、表面上は、実に何くわぬ顔をして生きているけれども、これは実に慾望の固りであり、そしてけしからん事ばかり考えており、よく嘘をつき、一人一人自分の心の中をふり返ってみればみんなそうです。

それを明確にみる能力というものが、この親鸞上人のいう罪惡感です。それは人間としての能力であるという

よりは、仏を信ずることによって、そういう能力を我々は与えられる、そういう意味であります。この罪悪の問題というのは非常に難しいし、また取扱いが困難です。何故困難かというのと、先程言いましたように、私達は自分勝手に、いろんな風に解釈しているからです。

そしてこれは歎異抄などにもよく出ていますが、そういう罪悪感の深い人間ほど仏に救われるならば、一つ自分には罪悪をおかしてやるうという人間もいるし、自分は毎日反省して、自分はいかに罪深い人間であるかということをお大勢の人の前にいいふらして、そして自分は宗教

的に深いという虚栄心を満足させている人もいる。そういう、自分で自分の罪をおもちやにしているということが一番よくないということをおもっています。大変これは取扱いの難しい問題です。ですから一流の宗教家というものは、例外なく罪に対して、実にデリケートな態度をとっています。

文学の場合もその点は同じです。例えば皆さん御存知の源氏物語、あれは日本歴史上最大の作品であり、現在でもなお、あれをしのぐ作品はございません。

現在の我々は、源氏物語を読む場合、あるいは映画に

なったり、芝居になったりしてみる場合には、ただ、光源氏の色好み、その情慾の刺激、あるいはその情慾の面白さだけに気をとられています。しかし源氏物語を嚴格に読んでみると、何故あの文学が今日まで大きな生命をもち、外国にも翻訳されている大文学で、今日まで伝って来ているかといえますと、確かにそこには情慾の世界というものが描れています。同時に罪の問題というものが必ずそこにからまっていますからです。

光源氏自身、多くの女性を遍歴して、色好みの頂天を彼は生きた。仏教の教えからいったら、これは地獄に墮

ちる身分であつて、宗教的には許されない世界です。

しかし、紫式部という人は、それを知っているわけですよ。宗教的には許されない世界を自分は今、描いているのだ。光源氏もそれを知っている。自分の行動というものは仏が許さない。罪深い行いである。ではどうするか。出家する以外にない。あるいは最後に死ぬ以外にない。それならば出家すればいいじゃないか、というと出家もできない。何故出家もできないかというところ、やはり自分の妻子が可愛いからと、この世に、この現実の世の中に未練が多すぎるからです。

これは現在の我々でもそうです。いろんな風に自分が迷ったり、失敗して、自分は駄目な人間だ、ではいつそ山へでも入って、一人こもった方がいいのではないかと、ふとそう思う時がある。しかしそうした場合に、自分の家庭はどうなるのか、みんなの生活はどうなるのか、多くのつき合いはどうなるのか、やはりこれを考えますと、心が逆転して、また元のとおりになってしまう。

光源氏という人はそういう生活を繰返している。その度毎に心の痛みというものを深めていったわけで、源氏物語というとすぐ色情の世界を思い出しますが、それだ

けではない。浄土経の影響を受けた罪悪感というものが必ずそれとからみ合って、つまりさつき言いましたように、宗教との対決、つまり自分は仏教を信じようか、信じまいか、信じたいと思うけれど信じきれない。それなら否定できるかというところ、否定したいと思うが、どうしてもできない。絶えず心の中で、動揺不安を続けている。これが人間性の実態であるという事を、それとなしに紫式部が非常に多面的に描いてきたために、源氏物語というものが今日でも、大きな生命を持っていると言っていると思うのです。



現在私達は、現代の日本のいろんな思想に直面しています。宗教思想もあり、哲学思想もあり、社会思想もあります。しかし私自身はそれらの思想と接触し、また、いろんな本を読む場合、私自身は原則として、それらの思想が一体罪というものをどう考えているのか、あるいは死というものをどう考えているのか、それを確かめます。

これは社会運動の場合でも、私は同じだと思います。社会主義とか、共産主義とか、そういう社会的な運動は、今後ますます盛んになるだろうと思うし、それは宗教と真正面から対決しなければならぬ、そういう要素を持

っています。対決するなら対決してもいいので、問題は、私が先程言いましたような心の中でおかす罪というものを自覚しているかどうか、あるいは自分自身がもし死ぬならば、一体どういう死に方をするか、そこまで自身身を押しつめて考えているかどうかです。これは何も思想問題だけでなく、我々自身、めいめい、自分自身に問いただすべきことだと思っております。それをやらないのが一番怠慢だと思えます。

現代の日本をふり返ってみると、いろんな面で御承知のとおり混乱を重ねています。特に東京のような大都会

にいますと、刺激が非常に強い。我々の目を大事な物からそらせるような、娯楽がみちみちていますから、そういう刺激の中で生きていますと、大事な問題というものをどんどん忘れていくものですが、特に微妙な心というものを忘れ易いのです。

私は道元禅師が中国へ留学して、日本へ帰って来て、ある人が道元に向って、あなたは一体中国へ行って何を勉強して来たのか、と聞いたところが、道元禅師はたった一言、「自分は微妙心というものを学んで来た」そう答えたという話があります。この微妙心というのは仏教

の中の一 番大事な要素だと思 いますが、私の勉強した範 囲内でもそう ですが、例 えば弘法大師の密教というものをよく読んでみますと、結局宇宙とか、人間の微妙性と いうものにどこまでも敏感であれとい っているのです。

人間の心というものは、極めてい つも動揺し、不安定なものです。私達めいめいの言葉による言語表現というものをとり上げてみても、大変あいまい です。これは私などは文芸評論を やりますから、い つでも言葉の問題に直 面せざるを得ないのですが、一 番大事なこと は、我々人間というものは、簡単に言えないのです。正直なところ

ろ。

例えば皆さんが信仰についていろいろ思ったり、あるいは心に多少でも複雑な悩みを抱いていたり、あるいは何かについてひどく感動した場合に、どういう状態に陥るかと申しますと、まず言葉を失います。

深い信仰に直面したり、優れた芸術に直面した場合、我々はまず沈黙というものを迫られる。どのように言ってみてもうまく言えないし、そして結局自分が一番言いたいことを心の中に押えたまま、我々人間というものは黙っている事が非常に多いと思うのです。現代という時

代の非常に大きな欠点というのは、この沈黙の状態を忘れたということであって、みんなが、ことに我々評論家がそうですが、やたらに饒舌になる。簡単に説明し、簡単に解釈し、簡単に断定してしまうのです。

しかし人間の一番こまやかな、複雑な心というものは、言おうと思ってもうまく言えないという、その沈黙の状態にあるのであって、それを私達は、いろんな事を言った場合に、その人の言葉、口に出していった言葉だけでなく、その人が言おうと思っても言い切れない心の中の沈黙というものを、察してあげなければいけないと思う

のです。それが微妙心です。

それはさつき言いました罪の問題にしましても、死の問題にしても、家庭上の不幸とか、あるいは病気とか、それぞれ悩みがあります。それを人に告げる。告げてみたところでうまく告げられるものではない。いくら言ってみてもまだ言いきれないものがある。人間の言語表現というものは最後には全部恨みを宿しています。

皆さんが、自分の言いたいことを言ったり、またお書きになる。しかし後でそれをふり返ってみますと、自分の言いたいことは殆んど言っていない。ああも言いたい、

こうも言いたいと思っても、うまく言えない。そういう恨みというものが人間の言語の表現というものの中には必ず宿っています。

みんなが言いたいことをいって死んだのではないのです。前にも言いましたが、それぞれに悩みを抱いて、しかも無名の人が多いのですから、非常に深い信仰を持っていても、本も書かなければ、何も表現しないのですから、外部には現れない。その外部には現れない世界に生きた人々によって歴史というものはつくられているのです。



そういう意味で歴史というものは巨大な恨みの歴史であると言っていていいと思います。同じことは現代に生きている我々にしてもやはりそうです。心の中にひそめたものをお互いにいたわり合うという、そういう微妙心、それが浄土真宗で申しますと、慈悲とっていていいと思います。極度にデリケートな、細やかな感覚というものが、宗教においては本当に大事だと思うのです。現代はすべて露骨に、どぎつく、しかも人の目につくように言わなければ関心をよばないという時代です。これは何も宗教だけでなく、文学でも、その他の芸能関係でも皆さん御

覧になりますと分りますように、何か人の目につくように、人をおつと言わせるように、そういうことばかりに工夫しています。

これはそういうものが繁昌するためにはやむを得ない政策かも知れませんが、そういう中に私達は何気なく住んでいますと、私達の感覚というのは非常に鈍感になります。我々の感覚が鈍感であるか、敏感であるか、それを計るには、自分がどの程度刺激を求めているか、求めているかによって決定されます。いろんな意味で刺激のほしい人ほど、鈍感です。

例えばセックスの問題でもそうです。現代ほど性というものが露骨に、どぎつく取扱れた時代はかつてないと思います。それだけに現代人ほどまた、セックスの本当の姿を知らない人間もないと思います。

これも日本の過去の歴史、例えば源氏物語なら源氏物語を読んでみても、性の問題は性の問題だけで終わっていないのであって、必ずそこには罪がからまり、また死の問題がからまり、あるいは宗教の問題がからまり、同時にまた快樂の問題もからまっています。性が性だけで独立して、露骨に取扱われるということは、西洋の歴史

にもないし、日本の歴史にもない。

それが現代では、そういう宗教的問題とか、そういうものは全部おきざりにして、ただ性なら性の問題だけを別に取扱う。だから私達は性について昔よりもよく知っていると思いつながら、実は何も知らなくなる。これは我々現代人の言葉もそうです。今は言論が自由だから、我々はなんでもいえると思つていますが、なんでもいえるという事はあり得ないので。それで言論の自由の中で、本当に美しい言葉というものを見失っている。自分で逆にながさつな、粗雑な言葉を使うことによつて、言葉の生

命というものを自分で失っている。やたらにセックス問題を取りあげることによって、その本当の姿というものを見失っているのです。

いつの時代にも乱用ということがこわいのです。仏教なら、仏教にしましても、いろんな、今申上げましたような事の中に埋れてしまって、もはや仏教についてなにも言わない。ああいうものはもう過去のもので、亡んでしまうものだという人がだんだん多くなっている。しかし、その時こそ仏教というものが生きる時なのであって、逆に仏教が非常に流行して、新聞でもテレビでも、雑誌

でも、朝から晩まで仏教仏教といったら、その時は必ず仏教の墮落した時です。乱用されるということが非常におそろしい。

これは仏教だけでなく、実際あるのか、ないのか、片すみの方に押しやられたような形の中で、すべての大思想というものは、息をふきかえすものであるというふうには私は思います。

大体親鸞上人の生涯をふり返ってみても、五人とか、十人とか、僅かな人を集めて、そしてぼそぼそした声でお説教して、みんなからはどこの乞食坊主だと言われ、

一体あんな教えは将来どうなるかわかったものではない、そう考えられていた教えが今日まで生きのびる。大宗教大思想はみんなそうです。

キリストなんかたった十三人しか弟子を持っていません。その中の一人は裏切るし、最後にキリストがはりつけにされる時は、十二人の弟子がみんな逃げてどこかにいってしまった。

すべて宗教の始まりというのは、そういう苦難の中で、もてはやされずに、どちらかという受難しながら、そこから本当の生命というものを獲得していったのです。

これは宗教だけでなく、文学でもすべてそうなのです、そういう要素が現代では不足しているように私には思います。現代思想の問題にしても、あれこれといろんな思想について説明することより、先程から言っていますように、思想というものを考える場合の根本は一体何かということと、日本人のものの考え方に関連して話したことにつきると思います。私自身、仏教に心をひそめながら、現代というものをふり返った時に、私自身、これから勉強していきたいと思うことは、今申上げましたようなことが中心であります。







日本文学電子図書館

---

## 日本人の思想

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本人の美と信仰」  
大和書房

1968年6月10日 初版発行

日本文学電子図書館